日本感情心理学会第 22 会年次大会

研究発表要旨（口頭発表）

５月３１日（土）　大会１日目　口頭発表①

OS01. 顔表情からのネガティブ感情認知における日タイ異文化

堀本美都子（神戸大学国際文化学研究科）
米谷　淳（神戸大学大学教育推進機構）

本研究では，在タイ日系企業で働く日本人の観察をもとに，タイ人がなぜ日本人は怒りやすいと感じるのかを検討するため，日本人とタイ人のネガティブ表情（悲しみ，嫌悪，怒り，恐れ）と無表情を刺激として提示し，日本人とタイ人に識別させた。その結果，怒りの表情の識別については，日本人とタイ人に違いが認められないが，タイ人が日本人の無表情を識別する際，タイ人の無表情より怒りと誤認しやすい傾向があることがわかった。

OS02. 他人を見下す人は他人の不幸も喜ぶのか？
―仮想的有能感の類型別に見る妬みとシャーデンフロイデの関連―

藤井　勉（Sungshin Women's University）
澤田匡人（宇都宮大学教育学部）

本研究は，自尊心と他者軽視傾向との組み合わせによる「有能感の 4 類型」に焦点を当て，妬みとシャーデンフロイデとの関連を検討した。92 名の参加者を対象にシナリオ実験を行った結果，特に自尊心が高く他者軽視傾向の低い「自尊型」と呼ばれる群の参加者のみ，妬みとシャーデンフロイデとの関連がみられなかった。他の類型ではもれなく両者が正の関連を示しており，自尊型が適応的な特徴を持つことの傍証が得られた。

OS03. 文化的自己観，アレキシサイミア，身体感覚／感情の弁別的明瞭性の関係

金井雅仁（筑波大学大学院人間総合科学研究科）
湯川進太郎（筑波大学人間系）

本研究は，日本人において，文化的自己観がアレキシサイミアとどのように結びつくか，文化的自己観がどのような過程を経て不明瞭な感情弁別に繋がるか，の 2 点を検討した。その結果，相互独立的自己観は感情伝達困難，外的志向と関連し，相互協調的自己観は感情同定困難，感情伝達困難と関連した。また，相互協調的自己観の高さが感情同定困難の高さと不明瞭な身体感覚弁別を経て，不明瞭な感情弁別に繋がる可能性が示唆された。

OS04. 真偽判断に及ぼす制御焦点の影響

小形佳祐（東北大学大学院文学研究科）
阿部恒之（東北大学大学院文学研究科心理学講座）

制御焦点理論における利得接近・損失回避志向が真偽判断に与える影響を検討した。214 名の参加者は促進予防焦点尺度（尾崎ら，2011）に回答したのち，「女性に生まれてよかったこと」というテーマに答えた 20 個の記述文に対して，それが嘘つき（男性）によって書かれたものか否かという判断を下した。その結果，想定された真偽判断に対する制御焦点の影響は確認されず，女性のほうが男性よりも弁別力が有意に高いという性差が示された。

OS05. シニア健康開発に心理学リテラシーを考案する実践への検証
—本人記述データと「感情」研究の交流におけるモデル設定—

糸魚川幸宏（Wisdom Inc）

記述データは想起，メディア刺激，文章刺激などで発生し金融パニック，東日本大地震以降の状況記述を生んだ。自己記録としての人生記録が抑えた感情から生まれた本人記述と「感情」研究の分野との交流を検証し具体的に町での健康開発のプロセスを心理学リテラシーとして組み立てることを論考した。

６月１日（日）　大会２日目　口頭発表②

OS06. 派生的感情および二重抑制と精神的健康の関連性

井ノ川侑果（筑波大学大学院人間総合科学研究科心理専攻）
山口正寛（東京未来大学こども心理学部こども心理学科）
湯川進太郎（筑波大学大学院人間総合科学研究科）

ある出来事によって生起した感情を抑制することで二次的に生起した感情は“派生的感情”と呼ばれ，その派生的感情を抑制することは“二重抑制”と呼ばれる。本研究では，大学生 253 名を対象に質問紙調査を行い，派生的感情および二重抑制と精神的健康の関連性について検討した。その結果，元々の感情を抑制するよりもむしろ，派生的感情の体験頻度と二重抑制頻度が精神的健康にネガティブな影響を与えている可能性が示された。

OS07. 特性尊敬関連感情尺度の作成の試み

武藤世良（東京大学大学院教育学研究科／日本学術振興会）

尊敬に関わる感情（尊敬関連感情）の感じやすさを測定する尺度の作成を試みた。作成した尺度と，理論的に関連が予測される既存の尺度（アタッチメント・スタイル，Big Five，自尊感情，自己愛傾向）で構成された質問紙調査を大学生 368 名に実施した。分析の結果，特性尊敬関連感情尺度は特性尊敬，特性心酔，特性畏怖の 3 因子構造として解釈でき，それぞれが他の心理尺度と異なる関連を見せることが明らかとなった。

OS08. 現場実験によるゴミの不法投棄抑制要因の検討

中俣友子（東北大学大学院文学研究科）
阿部恒之（東北大学大学院文学研究科心理学講座）

過去の実験で得られた成果を踏まえ，実際の河原における現場実験を実施した。景観（更地，草むら）と看板（目の絵・監視カメラ設置の文字表示・無し）の 2 要因を設定し，5 か月間に亘って条件別のゴミの不法投棄量を測定した。その結果，景観については更地，看板については目の絵を記した看板の条件でゴミの量が少なく，特に目の絵の看板の効果が顕著であった。＊本研究は学部 4 年生の中山なつみさんの協力を得て実施した。

OS09. 羞恥表出者に対する観察者のパーソナリティ評価
—失敗状況および成功状況を用いた検討—

福田哲也（広島大学大学院教育学研究科）
樋口匡貴（上智大学総合人間科学部）

本研究では，2 つの状況(表出者が失敗した状況と成功した状況)と 4 つの表情(3 つの羞恥表情と無表情)を組み合わせたシナリオを回答者に呈示し，各表情を示した人物についてパーソナリティ評価を求めた。各状況において表情間の差異を検討したところ，利己性の結果が特徴的であった。羞恥表情は，失敗状況では無表情と同程度利己的と評価されていたが，成功状況では無表情よりも利己的でないと評価されていた。

OS10. マインドフルネスにおける特性と状態の交互作用

伊藤義徳（琉球大学教育学部）

本研究の目的は，マインドフルネスの状態操作の効果にマインドフルネス特性が及ぼす影響を実験的に検討することであった。大学生を対象に，特性の高低と状態操作により 4 群（各 9 名）を設定し，失敗課題後，多様な従属変数を測定した。その結果，失敗直後の思考サンプリングには状態操作の，当日夜の質問紙には特性の影響が強く，翌日の思考サンプリングには交互作用が見られ，特性低群には前日の状態操作の影響が大きく見られた。

OS11. サイコパシー傾向者は他者から嫌われることをどう認知しているか？

河野和明（東海学園大学人文学部心理学科）
羽成隆司（椙山女学園大学文化情報学部）
伊藤君男（東海学園大学人文学部心理学科）

対人嫌悪には利己的な他者を排除する機能があると考えられ，互恵制維持に貢献していると思われる。サイコパシー(PP)傾向者は互恵制を脅かす可能性がある。では，PP 傾向者は「他者から嫌われること(被嫌悪)」をどう認知しているのだろうか。被嫌悪回避傾向と PP 傾向を測定した結果，一次性 PP と被嫌悪回避傾向は，女性のみに負の相関がある一方，二次性 PP 傾向には男女とも正の相関があることが明らかとなった。

OS12. 特別な呼吸法の事前実施が緊急事態時の行動を改善させる

上田真由子（西日本旅客鉄道株式会社安全研究所）
和田一成（西日本旅客鉄道株式会社安全研究所）
臼井伸之介（大阪大学大学院人間科学研究科）

我々の先行研究では，緊急事態になると，「深く考えず，粗略な行動をとる」傾向へと変化することがわかった。そのため，本研究では，Breathing Retraining（呼吸再訓練）法という特別な呼吸法を事前に実施することで，その不安全な行動にどのような影響を及ぼすのかを検討した。その結果，呼吸法を実施すると，実施しない場合と比較して「ある程度迅速で，思慮深い行動をとる」ことが示された。

６月１日（日）　大会２日目　口頭発表③

OS13. 対人間の制御に関する知覚制御理論的考察

金築　優（法政大学現代福祉学部）
金築智美（東京電機大学工学部）

対人間の行動の機能をどのように捉えるかは，社会的共生のあり方を考える上で重要である。本演題では，対人間の行動の機能を，知覚制御理論（Powers, 1973）の観点から考察する。この理論は，人を様々な目標を達成しようとする制御システムとして捉える。一方，この理論は，他人の目標を配慮せずに，他人を自分の目標だけに沿わせることの弊害を強調する。当日は，知覚制御理論による社会的共生への示唆に言及する。

OS14. 逸脱行動に対する感情評価の検討―災害時の創発規範―

Wiwattanapantuwong　Juthatip（東北大学文学研究科心理学講座）
阿部恒之（東北大学大学院文学研究科心理学講座）

非常時に形成される創発規範（emergent norm）の特徴を，感情の観点から明らかにすることを目的として，東日本大震災の被災 3 県と災害の少ない 3 県の成人男女 3,836 名を対象とするインターネット調査を行った。同じ逸脱行動に対し，平時と災害時における許容性と感情評価（怒り・恥）について評価を求め，性別・地域差などを検討した。その結果，災害時には逸脱行動への許容性が変化し，地域差・性差もあることが認められた。

OS15. 身体意識尺度の作成

馬　艶青（東北大学文学研究科心理学講座）

身体意識を広範にとらえる新たな尺度の作成を試みた。大学生 215 名を対象に 45 項目の質問紙を実施し，因子分析（主因子法，プロマックス回転）を行った。その結果，「公的身体意識」，「私的身体意識」などの 5 因子が抽出された。各因子から因子負荷量の高い 5 項目を選択し，25 項目の身体意識尺度を作成した。この尺度における性差を検討したところ，女性の公的身体意識は，男性に比べて有意に高かった。

OS16. 運の知覚の事前操作がギャンブル時の感情と行動に及ぼす影響

高田琢弘（筑波大学大学院人間総合科学研究科／日本学術振興会）
湯川進太郎（筑波大学人間系）

本研究は，運の知覚の事前操作が，ギャンブル行動（リスク・額・速さ・止め時），感情状態，運の知覚の変化に及ぼす影響について，実験的に検討した。実験参加者には，ギャンブル課題（Game of Dice Task-Revision；高田・湯川，2013）に取り組んでもらい，課題前に，（事前に操作された）くじ引きによる運の知覚の操作を行った。実験計画は，一要因三水準の参加者間計画（幸運群，普通群，不運群）であった。

OS17. 自然に対してなぜ感動するのか？：死の顕現性仮説からの検討

樋口匡貴（上智大学 総合人間科学部）
柳川美貴（(株) 日立ハイテクソリューションズ）
福田哲也（広島大学大学院教育学研究科）

美しい星空やオーロラなどを見ると感動することがある。この自然に対する感動に対して，死の顕現性が及ぼす影響を検討した。大学生 40 名を対象とした実験を行い，身体的および精神的な死の顕現性を操作し，その後自然現象に関する映像を視聴させ，そこでの感動を測定した。その結果，精神的に死の顕現性を増加させる操作が自然に対する感動を増加させることが示された。一方で身体的な死の顕現性は感動には影響しなかった。